

# はじめに

国際学部附属多文化公共圏センター センター長 田 巻 松 雄

国際学部附属多文化公共圏センターは、今年度発足10周年を迎えた。最初の2年、センター長を務め、今年度縁があって再度センター長を務めることになったが、その間も副センター長やセンター員という立場でセンターの活動に関わり続けた。関わらなかった年はなく、文字通りセンターと歩んで来た10年だったと言える。

センターに向き合う気構えは基本的に変わっていない。センター年報2号巻頭言に「友情と勇気」と題するエッセーを書いたが、そこに書いた内容を再掲する。

友情とは、共同体全体の利害に関わる問題について、開かれた空間において合意の形成を目指して討議する意欲、のこすことを指す。友人とは、このような討議を成り立たせるために必要な相手、のこすことをいう。そして、勇気とは、自ら進んで活動して語り、自身を世界の中に挿入し、自分の物語を始める自発性の中に現れる……。

さて、今回の年報では、2つの特集を組んだ。

1つは、今年度改組に伴って新規開講した授業科目「多文化共生概論」の振り返りである。

国際社会学科と国際文化学科を国際学科に統合再編した改組の目的は、「グローバルな実践力」を持って国際的分野で活躍する人材育成の機能を強化することである。そのために、「グローバルな実践力」の基盤として多文化共生に関わる社会科学と人文科学が一体化した体系的な教育プログラムを教授することを目指すこととした。今年度の多文化共生概論は、改組一期生を多文化共生の世界に誘うための文字通りの第一歩の授業であった。6名の教員が担当し、最初と最後が全体会、その間の6回は教員が一

人ずつ多文化共生の可能性や課題などについて話した。本特集は、6名の教員とそれぞれのセミナーに所属した6名の学生がこの授業を振り返ったものである。6名の教員は何を目的にどのような話を展開したのか。学生たちはそれをどのように受け止めたのか。じっくりと読んでいただきたい。

2つ目の特集では、昨年7月に開催したセンター設置10周年記念シンポジウム「地域課題への挑戦」の記録を掲載した。シンポジウムでは、高際澄雄先生と宮島喬先生をお招きすることが出来た。高際先生は、平成24年度と平成25年の2年間センター長を務められた。今回、「田中正造翁の活動の現代的意義」についてご講演いただいた。宮島先生はヨーロッパの移民問題や日本の外国人児童生徒教育に関する研究の第一人者であり、その博識を宇都宮の地で発信していただいた。演題は、「外国人児童生徒により教育の機会を」であった。参加者の多くがご講演を拝聴しながら、センターおよびそれぞれの「次の一歩」について様々な想いをめぐらしたのではないかと思う。

センター10年は、センターとして何をすべきなのか、何が出来るのかについて試行錯誤しながら進んできた10年であった。その10年目と学部改組後の初年度が重なった1年であった。目の前のことに埋没しがちな日々であるが、5年後10年後の学部及びセンターのあり方について、ぜひ、いろいろな方と語り合っていきたい。これまでセンターを支えてくれた様々な関係者の皆様、今号寄稿・投稿いただいた皆様、その他すべての関係者の皆様に御礼申し上げるとともに、今後とも叱咤激励いただきたくお願い申し上げます次第である。